

Title	開業助産婦を通してみる出産文化の変容 : 「自然」と「医療」の間で
Author(s)	伊賀, みどり
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49440">https://hdl.handle.net/11094/49440</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【2】

氏名	伊賀みどり
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 22425 号
学位授与年月日	平成20年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	開業助産婦を通してみる出産文化の変容－「自然」と「医療」の間で－
論文審査委員	(主査) 教授 荻野 美穂 (副査) 教授 川村 邦光 准教授 北原 恵

論文内容の要旨

本論文は、昭和初期から現代までの開業助産婦の業務内容やあり方がどのように変化したかを明らかにすることを通して、日本における出産をめぐる文化の変容について考察することを目指したものである。具体的課題としては、(1)「自然」出産はどのようにして誕生し、その意味するものはいかに変化したか、(2)分娩における「正常」と「異常」の範囲はどのように定められ、助産婦はどの程度まで医療行為を行ったのか、(3)旧免許世代と新免許世代の助産婦ではどんな違いがあったのか、(4)産む女性たちはどのような意識で出産していたのか、(5)「産まない文化」に属する「貰い子」の斡旋や中絶、家族計画指導に助産婦はどのように関わったのか、および(6)授乳文化の変遷を明らかにすることがあげられている。全体は第1部と第2部に分けられ、第1部は主に文献資料に基づく歴史的考察、第2部は5人の助産婦に対するライフヒストリー・インタビューを中心に構成されている。

序章において研究方法と課題を提示した後、第1部第1章では、本研究の出発点でもある某助産院で入院分娩した女性たちの残した記録をもとに、現代の女性たちが開業助産婦による出産に病院出産とは異なる「自然」さを求めていることが示される。

第2章は、明治から現代までの産婆・助産婦にかんする法制度と業務内容の変化を跡づける。旧制度の「産婆規則」下では産婆の業務は正常分娩の介助と定められていたものの、

実際には医師の立ち会いが不可能な場合に産婆が骨盤位や双胎のような異常分娩を扱うことも容認されていた。しかし1948年制定の「保健婦助産婦看護婦法」体制下では、異常分娩は医師の領分とする見方が強まる一方で、病院での帝王切開を避けるために骨盤位分娩を介助し、より「自然」な出産を標榜する助産婦も登場する。また優生保護法の下で家族計画指導が助産婦の新たな業務として登場した。

第3章では雑誌『主婦之友』の記事を用いて、産婆による自宅分娩の時代から戦後の病院・診療所出産へと移行していく中で、出産方法や妊産婦の出産観、および授乳の方法がどのように変化したかを考察する。帝王切開が増加する一方で、戦前にも戦後にも精神的無痛分娩の試みが行われていたこと、また「乳揉み」を専門とする人々が民間に多数存在し、母乳哺育のために重要な役割を担っていたことが明らかにされる。

第4章では、1960年代の病院・診療所出産の主流化とともに「計画分娩」に代表される分娩過程への医療介入が増加し、かつ母児別室のもとで粉ミルク育児が流行したことが指摘される。さらに続く第5章では、1970年代以降、こうした医療化された出産に対する批判が強まり、ラマーズ法出産や母乳育児の再評価、桶谷式乳房マッサージ、アクティブ・バース運動など、新たな「自然」出産の動きが広がっていく過程が叙述される。

第2部の冒頭の第6章は、ライフヒストリー・インタビューの方法、およびそこで聞き取った語りを文書化するうえでの留意点について述べている。

第7章と第8章は、旧制度下で資格をとり、戦前から戦後にかけて関西の某都市で開業してきた、年齢も経歴も異なる3人の助産婦のライフヒストリーである。それぞれの助産婦に対する多数回に及ぶ聞き取りを通じて、実際にどのように分娩を介助し、どのような医療行為を行ったのか、医師との関係はどうであったのか、哺育や乳揉みはどのように行われたのか、中絶や家族計画指導に助産婦はどのように関わったのか等々が、具体的に、かつ詳細に明らかにされている。

第9章は、新制度下で教育を受け、病院勤務を経て1980年代から90年代に開業した2人の助産婦のライフヒストリーである。彼女たちは、単に陣痛促進剤を使用しない、会陰切開をしないことだけを「自然」出産と考えるのではなく、出産する女性の食生活も含めたライフスタイル全体の自己管理を重視する点、および医療行為は避けて病院との協力関係を重視する点で、従来の助産婦とは異なることが明らかにされている。そして終章では最初の課題に即して、第1部、第2部を通して明らかになったことが整理されている。

論文審査の結果の要旨

近年、「自然出産」再評価の波に乗って元産婆や助産婦たちの評伝や聞き書きが多数出版されており、また出産にかかわる民俗学的・文化人類学的研究も少なくない。その中で本論文の持つ意義としては、まず、先行研究に見られるように1人の対象に焦点を絞るのではなく、世代も経歴も異なる5人の助産婦に対して丁寧な聞き取りを行い、それぞれのライフヒストリーの語りを比較対照することで、旧制度と新制度という時代的条件による助産婦業務の内容的変化を浮かび上がらせるとともに、ほぼ同世代であっても、助産婦ごとに業務に対する考え方や実践のあり方は多様であることを具体的に明らかにしたことがあげられる。

また、病院出産に対する批判からか、先行研究ではややもすると一切の医療介入を行わず、会陰保護に努めるなどの理想化された助産婦像が描かれる傾向が見られる。それに対して本論文においては、旧世代の助産婦はしばしば法的には認められていない陣痛促進剤

の投与を行っていたこと、会陰保護をそれほど重視していなかったこと、望まれない子の貰い子斡旋をしたり助産所に医師を呼んでの中絶を実施していたこと等々、助産婦の仕事のさまざまな「負の側面」が聞き取りを通じてヴィヴィッドに述べられており、これらの証言を得たことは出産文化の研究に対する貴重な貢献であると言える。

さらに哺育の問題に関しても、従来の研究ではほとんど明らかにされていなかった「乳揉み」という職業の実際について資料にもとづいて調査し、それが人工栄養の流行から母乳保育の再評価を経て、どのように現代の助産婦による乳房マッサージへとつながっていくかの道筋を示したことも、重要な成果である。

しかし問題点もないわけではない。先行研究の扱いや、それに対する本研究の位置づけを明確にすることに関しては、やや不十分な部分が目につく。また構成に関しては、論文の性格上ライフヒストリーの部分が多くを占めるのはやむをえないとしても、それ以外の部分では章によって内容・分量的にばらつきが目立つ。とりわけ現代のラマーズ法やアクティブ・バースなどの「自然出産」とウーマンリブ、フェミニズム運動との関係については、出産に対する女性の意識を考察するうえで重要な論点であるにもかかわらず十分な追究がなされておらず、今後課題を残した。さらに、鍵となる出産における「自然」という概念がいつ、どのように成立したのか、あるいは地方ではなく都市部を調査対象としたことの意義をどう考えるか、その他いくつかの重要な論点についても、より踏み込んだ議論の展開が期待されるところであり、それらの点では物足りなさが残る。

しかしながらこれらの諸点は今後の課題として残るとしても、本論文が多年にわたる聞き取り調査と文献調査にもとづいて、戦前から現在に至る出産文化の変遷を多様な角度から生き生きと描き出した功績は評価に値するものであり、よって博士（文学）の学位にふさわしいものと認定しうる。